

Child 子どもを守る Saving

② アグネス・チャンさんと
江藤創平さんの対談



教育問題の話がはじまると、
話題が尽きない3人。
左から、
高比良美穂、江藤創平、アグネス・チャン

子どもたちの笑顔が 国や社会を元気にする

「子どもを守る」シリーズ②

「子どもを守る」シリーズ2回目は、海外の教育事情に詳しいお二人の対談です。「子ども応援便り」編集長の高比良美穂さんをはさんで、教職員の団体である日本教職員組合青年部兼、国際部の江藤創平部長と、歌手、日本ユニセフ協会大使として活躍されているアグネス・チャンさんに国際的な視点から見た日本の教育課題について、語っていただきました。

高比良 こここのところ、国際情勢が不安定です。そのような状況下では、国や大人社会の思惑と関係なく影響を受けるのは、子どもたちです。アグネスさんは、ユニセフの活動を通して紛争時の子どもたちの実情を見てこられたと思います。

アグネス 争いが起きると、まずご飯を食べたり、学校に行つたりという、子どもにとつて当たり前のことが不可能になります。そして、肉親や友だちを亡くし、最終的に兵士として使われる子どももいます。

戦争が終わっても、子どもたちにとつての戦いは終わりません。戦後、大人の死亡率は下がりますが、水や食料、衛生上の問題などから、子どもたちの死亡率は何年も下がらないのです。

昨年訪れたソマリアは、長い間の紛争、干ばつ、「無政府状態」によつて、社会サービスが崩壊していました。子どもの5人に1人は5歳まで生きることができます。破壊された社会のきずな、あるいはしくみが立ち直るまで、子どもが普通に楽しめる毎日は戻つてこないのです。戦争の一番の犠牲者は子どもなのです。

高比良 どんな時にも、子どもたちは育つ権利があるはずです。日本教職員組合さんは、子どもの権利、人権に力を入れてらっしゃいます。

江藤 わたくしどもは、子どものより良い未来のための実践的などりくみとして、「子どもの権利条約」のキ

ありません。

アグネス 「趣味の問題だから、個人的に楽しむことまで禁止しないで」と主張する人もいます。多様な性のあり方は尊重されるべきですが、爱好者の多くは興味や好奇心で目にした画像などからその世界に入り込んでしまうことが多いです。子どもたち一人ひとりが、自分の力を最大に發揮できる環境を整えることが大切だし、そのためにも必要な法改正だと思います。

江藤 日本の教育現場の実情

高比良 児童ポルノで言えば、関連した犯罪件数も増える一方です。保護者、学校、地域社会が連携して対応すると同時に、やはり政府に一刻も早い対応をお願いしたいですね。

ところで、教育の現場における日本特有の問題に「教職員の多忙化」があります。

江藤 学校現場では、今、世代交代が起きていています。団塊の世代の退職で、若い世代が増えているのです。本来ならば、経験豊富でスキルの高い先輩たちのありようを見て、あるいは相談しながら経験を積んでいく職だと思うのですが、今は教職員同士が情報交換もできないくらいなのです。

高比良

ヤンペーんを展開してきました。

1989年の国連総会で採抲された「子どもの権利条約」の中では、子どもの生きる権利、育つ権利、守られる権利、参加する権利が定められています。このすべての権利が戦争ではあります。

事実上、奪われるわけですよね。よそ

の国のことだと無関心ではいられません。また、戦時でなくとも、経済格差が広がり、子どもの貧困率の高い

今の日本には、社会全体にこうした意識が必要だと思います。

「児童ポルノ法」の改正が必要

加害国と呼ばれる日本

高比良 「子ども応援便り」の企画で教育の国際比較をしていて感じることは、日本は、子どもに関するさまざまな分野で社会の意識が低く、対策が遅れているということです。

アグネス とても遅れていると思います。とくに「児童ポルノ」問題に関しては、国際社会の世論を考えると、まつなしの状況です。

案外、みなさんが存じないようですが、国際的に日本は児童ポルノの輸出大国とみられています。1996年、スウェーデンで開かれた第一回「子どもの商業的搾取に反対する世界会議」では、この点を指摘され、児童ポルノの「加害国」として、法整備の遅れを強く非難されました。その後、ようやく日本でも「児童ポルノ法」が成立したのですが、その内容を経過とともにみていくと、

日教組青年部調査によると、ある県の1ヶ月の超過勤務は平均約63時間。150時間を超えている人もいて、これは過労死基準の倍です。とくに、若い教員は一所懸命な分、子どもとの時間はしっかりとりたい、でも保護者対応に加え学校や自治体への報告書づくりはしなければならないといふことでどんどん負荷がかかって、精神を病む人が後を絶ちません。夢と志を持つた若い先生たちが、みるとうちに疲弊していくのを見るのはつらいことです。

アグネス そもそも、日本の小学校の先生のように、全科目をひとりで教えるというシステムは国際的にも特異ですよね。私の生まれ育った香港でも、欧米でも、もう何十年も前から教師はほとんどが専門制です。ふつうに考えて、算数と理科と音楽と体育と…。日本の先生はスーパー・マン・ウォーマン。もともとその教科が不得意だったという教師もいるはずです(笑)。それでは、子どものためにもなりませんよね。

江藤 個人や職場・地域の努力だけではどうにもならない構造的な問題もあります。教育環境の整備が、社会の変化に追いついていないというのが、公立の学校現場の実情です。そのひどい現象が結局、子どもたちに向かってしまいます。今、「問題行動」と見られている子どもたちの行動も、私たちが教職員へ向けたSOSだと捉えています。だから、そこをなんとかしたい。

江藤

です。

この対談は、3月9日に行われたものです。

学校を元気にするために、私たちは声をあげ、アプローチしていくことを思っています。そのことが、子どもたちを守ること、セーフティーネットをはることにつながると信じています。司会・構成
「子ども応援便り」編集長 高比良美穂



江藤創平

(えとう・そうへい)

2001年より佐賀県内公

立小学校教員。

2008年より日本教職員

組合中央執行委員。

現在、青年部長と国際部

長兼任。

アグネス・チャン
(あぐねす・ちゃん)

歌手、教育学博士、三児の母。1984年エチオピアの飢餓地帯を取材後、芸能活動、ボランティア活動、文化活動と多方面で活躍。現在、日本ユニセフ大使。

